



金子常光画
「竹野屋旅館」 マッチ箱ラベル



島根県鳥瞰図

島根県名勝遊覧図繪

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

シジミの名産地で著名な宍道湖の北岸沿いを走り、地元では「ぼたでん」と愛着を込めて呼ばれている一畑電車。松江しんじ湖温泉駅（旧・北松江）と電鉄出雲市駅（旧・出雲今市）を結ぶ北松江線（三十三・九km）と、途中の川跡駅から分岐して出雲大社前駅（旧・大社神門）を結ぶ大社線（八・三km）から成る。

一畑電車の前身の一畑軽便鉄道は、開業翌年の大正四（一九一五）年、目の神様一畑薬師へ参詣客を運ぶ目的から出発した。出雲今市—一畑間を往復。昭和二年に電化。翌三年には北松江方面、さらに出雲大社方面へと電化延伸している。

本図の初三郎鳥瞰図は、「島根県鳥瞰図」の昭和十二年三版（初版昭和五年、改版昭和九年）であり、五十三歳のときの作品である。出雲市—松江市を結ぶ一畑電鉄の都市間連絡鉄道としての機能が高まってきている路線状況が、当時の山陰本線

藤本一美
首都大学東京・専修大学非常勤講師。地図情報センター理事。日本地図学会評議員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に「旅と風景と地図の科学Ⅱ」（私家版 2006年）、最新刊に「展望の山50選 関東編」（東京新聞出版局）がある。



『島根県鳥瞰図 [島根県名勝遊覧図絵]』
 (昭和12(1937)年8月20日3版)
 島根県観光協会 発行
 京都市内の観光社出版部 印刷

神話の国「出雲」と水の都「松江」を結ぶ。 観光と沿線の生活を支える地域の鉄道。



一畑電車株式会社

Ichibata Electric Railway Co.,Ltd.

開業：大正3(1914)年4月29日
 設立：平成18(2006)年4月1日
 本社：島根県出雲市平田町2226番地

一畑電車は、大正3年に一畑軽便鉄道(現・一畑電気鉄道株式会社)として運行を開始し、平成18年より一畑電気鉄道株式会社からの分社独立を経て一畑電車株式会社となった。沿線住民の生活に欠くことのできない地域密着の鉄道として100余年の歴史を刻み、「愛され乗ってもらえる電車」を目指している。

また、松江-平田-出雲・出雲大社を結ぶ二つの路線は、島根県を代表する観光ルートで、沿線には多くの名所が並ぶ。観光の足としての役割も大きく、「ご縁の国しまね」キャンペーンの一環として、松江-出雲間に「ご縁電車」を走らせるなど、島根観光を盛り立てている。



などの国鉄線と同様にわかりやすく図化されているようだ。

ただ、残念ながら図示の小境灘駅(現・一畑口)―一畑駅間は、昭和十九年に休止(昭和三十五年には正式廃止)となってしまう。

カラフルな彩色(春のピンクの桜と秋の紅葉も)と大胆な構図は、日本海側上空から眼下に陸側を描写したもので、中央左に県都松江市街と松江城、六道湖をはさんで右に出雲市街と出雲大社の境内を配置。背後に大きな三瓶山と麓の志学(現・三瓶)温泉の湯煙や立久恵峡、江ノ川流域の名勝、玉造温泉、温泉津、津和野町もしっかり描画している。

左端には隠岐島航路と結び港町美保関・境港の存在、安来の清水寺の左奥には出雲富士大山(鳥取県人は伯耆富士と呼ぶ)、さらに遙か遠くには、いつものことだが本家の富士山が、右端には下関の先に朝鮮金剛山までも入れている。細部を見ると文豪ヘルン(小泉八雲)旧居や雪舟墓まで表示していて嬉しくなる。

なお、島根県内を描く初三郎図は前述の三点の他に「石見吉田案内」「浜田みなと」などがある。初三郎最大のライバル金子常光図は十三点ほど判明。マッチ箱ラベル表紙絵(昭和八年)のみ参考までに添えておきたい。